

シリーズ再開

本シリーズの[その1](#)、[2](#)、[3](#)では、生成 AI の中核技術である LLM（大規模言語モデル）の紹介を行った。そのエッセンスは、①ニューラルネットという 1980 年代に発展した AI 技術が基礎となっていること、②言葉をコンピュータで扱うために、ある単語の前後の関係や文脈に基づいて、単語を数値化する技術を活用していること、③文書の生成は、次に来る単語としてもっともらしいものを確率的に選ぶという作業の繰り返しによっていることであった。

その後、当研究所の機関誌「[所報](#)」6号に掲載した技術展望論文では、2024 年初夏までの LLM の発展動向を詳細に解説した。上記③のような単純なアプローチでも、LLM を巨大にし、莫大な文章を学習させ、計算資源を注ぎ込めば、LLM の性能が比例的に向上し続ける現象が発見されたことや、RAG やファインチューニングなど実務への応用に向けた最新技術などを紹介した。LLM の本質的な理屈を効率的に学ぶことができる。

2024 年は、生成 AI の応用技術や提供サービスが大きく発展し、ビジネス活用への本格的な取り組みが始まった年であった。ChatGPT のような簡単に使える汎用 Web アプリケーションが多数登場したほか、広範なリソースを検索してレポートを作成する Deep Research 系のサービスや、繰り返し推論を得意とする LLM の登場、これを活用した Thinking 型 Deep Research の発展が進んだ¹。

また、生成 AI の民主化も急速に進展した。例えば、パブリッククラウドで生成 AI サービスを開発する手法が拡張したことや、大量の計算リソースを安価に使えるようになった。このほか、ノーコード開発ツールが進化を続け、Copilot など生成 AI サービスをオフィスアプリやプログラミング環境へ取り込む動きが進んだほか、最近では、複雑なタスクを分割して複数の AI エージェントに担わせることで高度な自動処理を行う技術が注目されている。2025 年は業務プロセスの再構築を AI エージェントで行う試みが活発化するといわれている。

そこで、本シリーズのその4以降では、理論からビジネスへの実装にテーマシフトし、具体的な応用例を取り上げながら生成 AI 技術の発展を紹介する。上記の「[所報](#)」6号では、最終節で「アプリケーション実装の学び方」を示したが、その実践編に相当する。

作ってみよう Podcast

初回は Podcast の作成である。これは 2 つの生成 AI 技術の組み合わせで実装できる。一つ目は、スクリプト（原稿）の作成であり、レポートなど一定のまとまりがある文章を LLM に読み込ませ、その内容紹介や話題発展型の対談スクリプトを作成させるという技術である。

どのような対談にするかは、LLM への指示、いわゆるプロンプトで細かく設定できる。作成言語、対談人数、話者の役割分担、カジュアル/オフィシャル、長さや構成、元レポートからの乖離度合い（忠実か発展型か）、話の解像度（大まかな紹介から緻密な議論まで）など、言葉で指示することで自在にスクリプトが作成できる。なお、[その 1](#)や「[所報](#)」6 号で紹介したように、生成 AI は確率的生成モデルであるため、同じ指示を与えても作成物は同一とはならない。

二つ目は、完成したスクリプトを音声言語化する技術である。後者は、一般に TTS（Text-to-Speech）と呼ばれており、音声を文字起こしする STT（Speech-to-Text）とあわせてマルチモーダル化した LLM の機能として主要 LLM 開発企業から提供されている。音声技術に特化したサービスを SaaS として Web 上で提供する企業も増えている。例えば、自分の声を一定分量学習させることで、合成された自分の声でスクリプトを読み上げさせることも可能になっており、口調や速度、トーンなども自在にコントロールできるサービスが誰でも利用可能になっている。

レポートなどのオリジナル原稿をそのまま TTS で音声化すると、オーディオブック風のサービスを作成できる。オリジナル原稿が読み上げには適していない文体であった場合、前処理として LLM に口語調に変換させるといった対応法もある。Podcast のほうが二名の掛け合いトークになるので音声化において少し工夫が必要となるが、OSS（オープンソースソフトウェア）の利用やサンプルコードを参照することで簡単に作成できる。

サンプル題材として、筆者のレポート「[渡来銭と暗号通貨](#)」（2023 年 6 月公表、5,000 文字程度）を用い、1) Web アプリで簡便に作成する方法、2) ノーコード開発ツールを使う方法、3) Python ベースの OSS を使う方法、4) Python から LLM を動かす方法の 4 つを紹介する。本稿では最初の二つを取り上げ、次号で後二者を紹介する。実際に作成した事例（音声サンプルとスクリプト）は、OpenAI が 3 月下旬にリリースした最新の TTS（gpt-4o-mini-tts）を用いて作成したものを紹介する。

Podcast を Web アプリで

Podcast の最も簡単な作り方は、[NotebookLM](#) という Web アプリケーションの使用である。NotebookLM は、Google が開発した AI サービスで、利用者が提供・指定する文書（ネットにある資料やサイトページの URL 指定も可能）をもとに、情報の整理、要約、アイデア生成などを支援するツールである。利用者が指定した特定の情報ソースに基づいて応答を行うため、ハルシネ

ーションを抑制した正確な回答が得られる。読み込んだ内容に関する質問を Chat 用のボックスから与えると、情報ソースの参照箇所を示しながら回答してくれる。この4月には Deep Search 的なネット情報検索と、結果のまとめ機能が追加されている。なお、裏で動いている LLM エンジン は Google の Gemini であり、2025 年 4 月現在で Gemini2.0 が使用されている。

NotebookLM は、指定した情報ソースの内容を Podcast 化し、音声ファイルとして提供する機能も有している。図1の右上「音声概要」にある作成ボタンをクリックすると数分で作成され、Web サイト上で試聴したり、PC などローカル端末にダウンロードすることができる（図1では作成後にプレイボタン▶が表示されている様子を示している）²。

2025 年 4 月現在では英語音声化のみに限定されている（元ソースは多言語対応）が、男女 2 名の対話で Podcast 風のカジュアルなトークショーが生成される。スクリプト（会話原稿）の作成方針や音声化に際しての指示に関する調整機能は提供されていないが、スクリプトの内容は元のソースを的確に消化したうえで上手く構成されており、また、英語音声の質は人間の会話と区別がつかないくらい精巧である。Podcast の対話にユーザが参加する機能も有しており、試聴を途中で止めて質問や話題などを投げかけると、これに応じてくれるという双方向型のサービスも提供されている。

NotebookLM は Google のアカウントさえ持っていれば（gmail 使用者はメールアドレスがアカウント）、誰でもすぐに利用できる。自分の書き物が手元やネット上にあれば、それがどう英語 Podcast 化されるかを簡単に体験できる。

図1 NotebookLM での Podcast 作成



出所) 筆者作成。ドキュメントをアップもしくは URL 指定すると、中央部にサマリーが表示され、右下の学習ガイドやブリーフィング・ドキュメントなどのボタンメニューで文章が自動作成される。中央下部には質問チャット用の入力ボックスがある。

ノーコード開発 Dify での作成

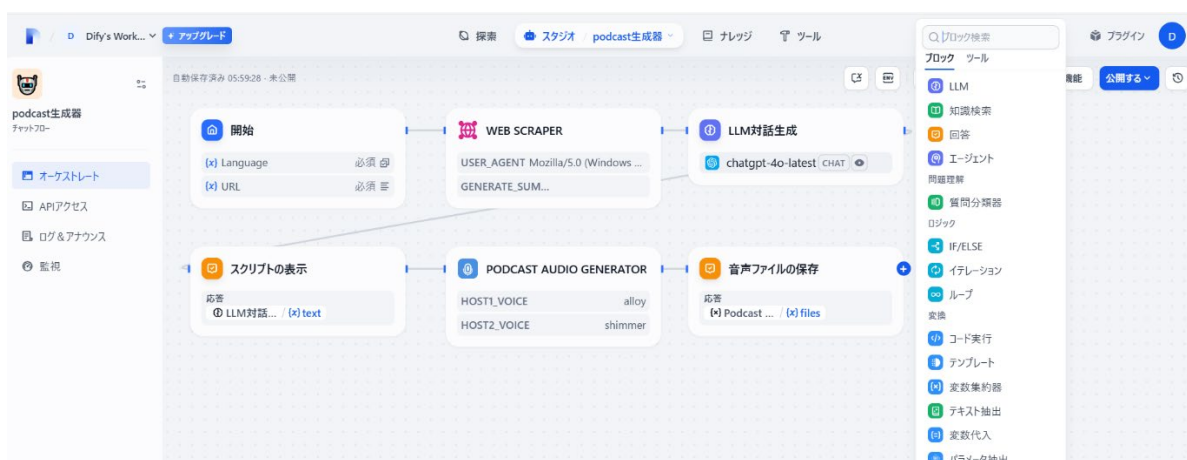
次に、生成 AI サービスのノーコード開発で有名な Dify を用いて podcast を作成した事例を紹介する。Dify は生成 AI 技術を活用したアプリケーションを誰でも簡単に開発・運用できるオープンソースのプラットフォームである。ノーコード（プログラムのコーディングを必要としない）またはローコード（殆んど必要としない）という簡便なツールで、AI チャットボットやタスク自動化ツール、FAQ 応答システムなどを構築することができる。ChatGPT や Claude、Azure OpenAI など、複数の大規模言語モデル（LLM）に対応しており、用途やコストに応じてモデルを選択できる。

Dify の最大の特徴は、ドラッグ＆ドロップで視覚的にサービスを構築できる優れたユーザーインターフェイスである。専門知識がなくても、作業内容を言葉で指示することができるほか、情報の読み込ませ方などを簡単にセットでき、自分のニーズに合った AI アプリケーションを直感的に構築できる。外部データベースやインターネットに接続し、情報を検索・収集し、これらを LLM に与えて作業させることも可能である。

図 2 は Dify で podcast 作成サービスを構築した一例である。6 つの作業ブロックで全体が構成されており、ブロック間のデータの受け渡しが接続線で示されている。左上の開始ブロックでは、読み込ませる文書の URL アドレスを入力するボックスと作成言語の指定ボックスを設定している。実行すると入力画面が開き、そこに Podcast の言語や、対象文書の URL を与える仕組みとなる。

次のブロックは、引き渡された指定 URL のページから HTML のタグ情報などを削除し、内容のみをスクレイピングするツールである。メニューから選択するだけで画面上に配置され、直前のブロックから受け取る情報をセットするとブロックを結ぶ線が表れる。

図 2 Dify での Podcast 作成

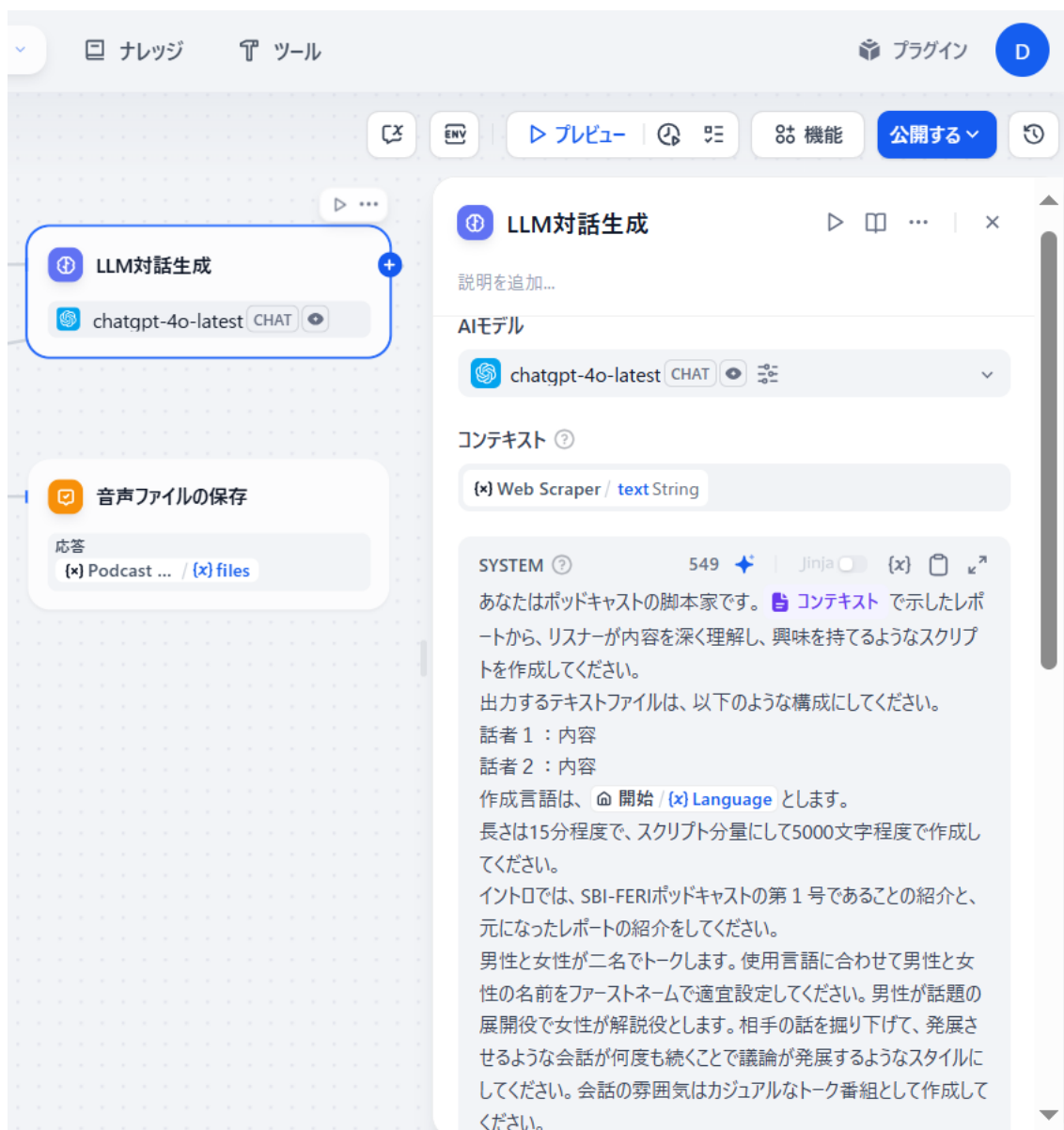


出所) 筆者作成。左上から始まって右下で終わる作業の流れを折り返し表示でレイアウトしている。

次のブロックでは整形された文書本体が LLM に引き渡される。このブロックには、Podcast をどのように作成したいのか細かい設定指示をプロンプトとしてセットする（図 3）。コンピュータに対して自然言語で作業を指示できる点が生成 AI の特徴の一つである。各ブロックの設定画面はブロックをクリックすると画面に現れる。

どの LLM を利用するかもここで設定する。LLM には API で指示内容や読み込む文書情報が引き渡されるため、使用する LLM から API-key を事前に取得し、Dify のメニュー画面で事前にセットしておく必要がある。多くの LLM は無料使用枠が設定されており、API-key も無料で取得できる（他者に利用されないよう管理が重要である）。

図 3 LLM への Podcast スクリプト作成の指示部の拡大表示



出所) 筆者作成。

図2の左下のブロックでは、右上の LLM ブロックで作成された対話スクリプトを Dify のチャット画面で表示させる処理を行う。同じ内容を次のブロックに引き渡し、ここで SST による音声化を行う。OpenAI の tts-hd1 を利用しており、複数の英語話者から男女を選択・設定している。対話スクリプトは日本語で作成しており、英語話者に日本語を音声化させているので、出来上がった音声は日本語が上手な英語母国語圏の話者風のトークとなる。漢字も正確に発音でき、対話スクリプトのうち正しく発音できなかったのは当方の名前である副島（そえじま→ふくしま）と渡来銭（とらいせん→わたらいせん）の2つのみであった。なお、本稿では OpenAI のアカウントのみでスクリプトと音声化対応を行っているが、日本語に特化したサービスを別途利用すれば、自然な日本語での音声化が可能である。

最後のブロックでは作成された音声ファイルを受け取ってローカル端末に保存する機能が提供されている。図2では、最後のブロックの右端をクリックすると次にどのブロックを設置するか候補がリストとして表示される。いずれのブロックからでもこの機能呼び出すことができる。図2では隠れているが「ツール」メニューからは前ブロックで利用した Podcast generator や Web Scraper のほか、様々なツール呼び出すことができる。例えば、Google 検索ほか各種の検索サービス、GitHub や ArXiv など様々なアーカイブ、画像生成 AI、クラウドの AI サービス（Amazon Bedrock や Azure OpenAI）、Slack などを Dify から利用するツールが提供されている。こうしたツールを活用することで、種々の生成 AI サービスを作成することが可能となる。最後に、Dify で作成した対話スクリプトを後段で紹介する³。日英両方で作成しており、いずれもトークスタイルはカジュアルだがレポート内容をしっかり理解した会話となっていることがわかる。

次回その5では、Podcast 作成の後編として、1) [Apache license2.0](#) に沿って OSS として提供されている Python コードを利用して作成する方法と、2) 最新の OpenAI が 3 月下旬に公開した最新の TTS で Podcast の音声ファイルを作成した事例を紹介する。

¹ 従来の Chat 系サービスは LLM が有する知識を用いて回答を返すものであった。これに対し、Deep Search では、質問に関する適切な情報をインターネットから検索・収集したり、複数の LLM に同じ質問を投げて回答を集め、これらの情報を集約することでより包括的で正確な回答を生成するサービスが提供される。2023 年ごろに登場し始め、2024 年には主要 LLM 開発企業が汎用型 LLM に導入を進めた。特に調査研究に焦点を当てたものは Deep Research と呼ばれる。並行して Thinking 系の Deep Search/Research も発展している。こちらは、推論を得意とする LLM に、ステップを踏んだ推論や、複数の枝分かれ思考経路、推論とアクションの繰り返しなどを行わせ、回答の高品質化を図ったものである。

² NotebookLM を含む Google サービスの利用規約については[こちら](#)を参照。

³ 3 月後半に Podcast generator が不調となっており、4 月上旬現在でも回復していない（ネット上でも同じエラーが返されることが報告されている）。このため、ここではスクリプトを紹介するにとどめた。Dify のようなノーコード開発ツールでは、提供されているツールに不具合が生じると代替選択肢がない場合、対応が困難となる。不具合の修正もツールの提供元次第である。これに対し、次回紹介するようなコードベースの開発では比較的柔軟な対応が可能となる。

1. 日本語 Podcast スクリプトの作成事例

話者1 (ケン): みなさん、こんにちは! 「SBI-FERI ポッドキャスト」へようこそ。記念すべき第1回のお相手は…私、ケンと…

話者2 (ミカ): ミカです。よろしくお願いします!

ケン: この番組は、SBI 金融経済研究所、通称 SBI-FERI のレポートや研究テーマをもとに、現代の金融やテクノロジーを、生活者目線で分かりやすく掘り下げていくトーク番組です。

ミカ: はい! 第1回のテーマは…「渡来銭と暗号通貨」。いきなりディープで歴史ロマン溢れるネタですね!

ケン: そう! もとになっているのは、SBI 金融経済研究所の新任研究主幹、副島豊さんのレポート。

ミカ: マニアックでありながらも、めっちゃ今っぽいですよね。というのも、テーマが「古代・中世の日本のお金」からスタートして、そこからどう暗号通貨につながるのかっていう壮大なお話なんです。

ケン: で、今回はそのレポートをもとに、「お金ってそもそも何なのか?」っていう、シンプルだけど深〜い問いを一緒に考えていきたいと思います!

ミカ: それでは、早速トークスタート!

ケン: まず最初に、副島さんが「貨幣は社会の最重要インフラのひとつ」って言ってるんだけど、これってどういう意味だろう?

ミカ: うん、貨幣って単にお金じゃなくて、社会の中で「信用」や「やりとりの仕組み」を成立させる基盤ってことなの。たとえば、オンラインで何かを買うとき、「この支払い大丈夫かな?」って心配しなくて済むのは、お金がきちんと機能してるから。

ケン: 確かに、払ったら届く、もらったら確かに価値があるって感覚って、ものすごく当たり前に見えるけど、それを成立させてる仕組みって、実は深かったりして。

ミカ: まさに! で、副島さんのレポートでは、その「仕組み」がどう作られてきたのか、古代から中世、そして今現在、暗号通貨に至るまでを追ってるんですよ。

ケン: じゃ、その始まり「古代」なんだけど、日本で最初に政府が出したとされる和同開珎（わどうかいちん）っていうお金、これどういう位置づけだったの?

ミカ: 簡単に言えば、税金とか労働の対価を払うための「国家のお金」です。面白いのが、貨幣そのものの金属としての価値よりも、「政府がこれで支払うよ」って公言したことが価値を生んでたの。いわゆる「表面価値」がリアルの価値を上回ってたのね。

ケン：なるほど！で、つまりそれって、現代の「1万円札」の紙自体には、そんな価値がないのちょっと似てるよね？

ミカ：その通り。信用に裏打ちされた存在ってこと。でも、当時はそれを人々に理解させ、流通させるには相当大変だったみたい。実際、私鑄（＝勝手に偽物作り）が大量に出回ってたし、通貨の価値自体もどんどん変動して、最後は発行ストップになっちゃった。

ケン：なるほど…古代の「国家が発行する貨幣」って、必ずしも万能じゃなかったってことですね。

ミカ：で、次に来るのが中世。この時代のお金の進化がまたワクワクでして…

ケン：まさかの「お坊さんや貴族」が自分たちでお金、じゃないけど「支払できる証書」を発行してたんでしょ？

ミカ：うん！いわゆる「信用貨幣」って呼ばれる構造で、例えば「この証書を渡せば、あとで〇〇に支払ってくれる」みたいな。為替手形の原型みたいなもので、紙がメインだったのも特徴。そしてこの時代に登場してくるのが…

ケン：キター！今回のキーワードの一つ、「渡来銭」！！

ミカ：はい。渡来銭っていうのは、中国—つまり外国から輸入された貨幣のこと。驚くのは、国家が発行したものじゃないのに、日本国内ですごく広く流通しだしたってとこ。

ケン：それって、極端に言えば、今の日本で「ドルコイン」とか「eユーロ」がコンビニで使われ出すようなものでしょ？

ミカ：そう！それなのに、みんながなんとなく「これなら安心」と思って受け取ってた。もちろん、経済成長に対して圧倒的に貨幣が足りなかったって事情もあるんだけど、ポイントはそこだけじゃない。

ケン：何がそんなに「安心感」を生んだの？

ミカ：ひとつには、渡来銭が「最終的に税金の支払いに使える」ってことが明示されたことで、一般の人々も「じゃあこれ、安心して持てる」と思ったのね。それによって、次第に「税なんて関係ない人」同士の取引にも広がった。

ケン：なるほど、「最後にちゃんと使える場所がある」って、まるでキャッシュレス時代の電子マネーと同じだね。加盟店が少ないと不安だけど、コンビニで使えるってなった瞬間に普及する、みたいな。

ミカ：的確な例え（笑）！だから、制度的な信用だけじゃなくて、「日常で使える」って経験の積み重ねが、お金としての受容性を高めていったところが面白いの。

ケン：そこから暗号通貨の話にぐぐっと現代に戻ってくるんだけど…副島さんは、渡来銭とビットコインとかを「構造的に似てる」って言うてるよね？

ミカ：うん。どちらも「国家が裏付けしてない」し、「素材そのものに価値がない」し、「ある程度コストさえ払えば誰でも発行できる」という性質がある。

ケン：つまり、マイニングに電気代と計算力を使えばビットコインが手に入る＝昔は銅とか輸送料を払えば貨幣を輸入できる…みたいな？

ミカ：その感覚に近い。ただし、大きく違うのは「一般受容性」。

ケン：うん、それは確かに。どれだけブロックチェーンがすごくても、日常のスーパーで「今日はビットコインをお願いします！！」って言えないもんね（笑）

ミカ：そこなんです。納税に使える、日本円に確実に両替できる、っていう安心感がある貨幣と比べて、暗号通貨は「価値が保証されてない」から、どうしてもボラティリティ（価格変動）が大きい。

ケン：でも、それって逆に、「投資対象」になるからおもしろがられてるところもあるよね。

ミカ：うん。ただということは、暗号通貨が本当に「お金＝マネー」として機能するには、価値の安定性とか、受容範囲をどれだけ広げられるかがポイントになるってことだね。

ケン：じゃあ未来に向けて、貨幣ってどうなっていくと思う？

ミカ：副島さんは、そのヒントこそ「貨幣の三大機能」にあるって言うてるよ。つまり、「価値の保蔵」「価値の尺度」「交換の手段」。この3つがうまくバランス取れてるかが焦点。

ケン：ニワトリが先か卵が先かじゃないけど、どれかだけあっても他が伴わないと「マネーらしさ」って出てこないんだね。

ミカ：そう。たとえば、いくら「価値の保蔵」ができて、それを日常生活で使えなければ「交換手段」にはならないし…って話。

ケン：あと現代的にいうと、中央銀行が発行する「現金」と、民間銀行が発行する「預金通貨」の二層構造とか、ステーブルコインやCBDCみたいな試みも出てきてるわけで。

ミカ：うん。そういった新しい貨幣システムの模索の中で、デジタルとリアル、中央集権と分散型、そのバランスが問われてる時代と言えるかも。

【ゆったりとしたエンディング音楽♪】

ケン：ということで…初回だったけど、話が深かったね。こんなふうに見遠い過去の「渡来銭」が、暗号資産にも通じる話だとは！

ミカ：ほんと、貨幣の歴史は「人の信用の歴史」でもあるんだなって感じました。リスナーのみなさんにも、「お金って何？」って少し考えるきっかけになったら嬉しいです。

ケン：はい、それでは次回も、日常と未来がつながるテーマをお届けしていきます。SBI-FERI ポッドキャスト、この番組がみなさんの思考のスパークになることを願って！

ミカ：今回はありがとうございました！またお会いしましょう～！

2. 英語 Podcast スクリプトの作成事例

注意：LLM の性質により、作成するごとに内容が異なる。上記日本語版の英訳ではない。

Michael:

Hello and welcome to the very first episode of the SBI Financial & Economic Research Institute Podcast?also known as the SBI-FERI Podcast! I'm Michael…

Emily:

And I'm Emily! We're really excited to kick off this brand-new series where we explore cutting-edge ideas and timeless lessons in finance, economics, and technology.

Michael:

Today, we're diving into a fascinating topic straight from the debut research report by SBI-FERI's new chief researcher, Mr. Yutaka Soejima. His report is titled "Toraisen and Cryptocurrencies"?a comparison between ancient Japanese coinage and modern digital assets. Sounds like a pretty wild combo, right?

Emily:

Definitely unusual, but incredibly relevant today. The report walks us through how past monetary designs?like coins from China used during medieval Japan?can actually give us insight into how we think about cryptocurrencies today. So don't worry, we'll keep it light and fun while digging into the deep stuff.

【Segment 1】 Who should create money?

Michael:

Let's kick off with a question Soejima poses right at the beginning: Who should be responsible for issuing money? It seems obvious, right? The government, of course!

Emily:

You'd think so, but historically, that wasn't always the case. For example, in ancient Japan, various types of coins were produced by different entities?not just the central government. One of the earliest known was the "Wad?kaichin," issued around the 8th century.

Michael:

Ah, nice pronunciation there, Em! So these were like Japan's first official currencies?

Emily:

Exactly. But interestingly, they weren't backed by the actual metal value?say, silver or copper?but were instead assigned a face value. For instance, one copper coin might equal one day's labor or a certain amount of rice.

Michael:

So kind of like gift cards today? They say "this is worth 500 yen" but the actual plastic card might cost, like, 10 cents to make.

Emily:

Exactly! And just like with gift cards, there were risks. People realized they could privately mint look-alike coins and pocket the difference. This led to widespread "unauthorized minting"?basically ancient counterfeiting.

Michael:

So the state's control over currency wasn't as solid as we tend to assume.

【Segment 2】 Credit money and private issuers

Michael:

Okay, fast forward a few centuries to medieval Japan. Coins fell out of favor, and then, something new popped up?credit money. What was that about?

Emily:

Right, so as physical coins became impractical, people started using "payment instructions"?kind of like early checks. These were issued by temples or local nobles, not the government, and they were tradable. So we're talking about private-issued promissory notes functioning as money.

Michael:

Oh wow, so like today's e-money or PayPal balances?private companies issuing value that people actually use.

Emily:

Exactly. Those early forms of money didn't rely on precious metals either. What gave them value was trust: trust that someone, somewhere, would accept them in exchange for goods or services.

Michael:

That "trust system" feels... familiar. Almost Web3-ish, don't you think?

Emily:

Totally! It's all about building networks of trust and usability. Whether it's a monk or a fintech app, if people believe they can use it tomorrow, they'll use it today.

【Segment 3】 What's the deal with Toraisen?

Michael:

Now here's where it gets super interesting. The "Toraisen," or "imported coins," were Chinese coins shipped into Japan in the medieval period. But?get this?they weren't backed by metal content or tied to any issuer's debt. So how did they gain value?

Emily:

Great question. Imagine you picked up some arcade tokens in another country and brought them home. Normally, they'd be useless?unless for some reason, your local store says, "Sure, I'll accept those." That's essentially what happened in Japan.

Michael:

So they weren't official currency, weren't linked to silver or gold, and had no issuer guarantee?

Emily:

Exactly. They just... worked. Their usability grew out of necessity. As trade expanded and cloth or rice became cumbersome to use as money, these small and uniform coins became easier alternatives.

Michael:

So they were like the duct tape of economics?didn't matter where they came from, as long as they held things together.

Emily:

Love that analogy! The government even discouraged people from being picky about fake or worn-out coins by passing laws to accept them anyway. The usefulness dictated the value.

【Segment 4】 Cryptocurrencies?the digital Toraisen?

Michael:

Now here's the kicker? Soejima draws parallels between the Toraisen and cryptocurrencies. That blew my mind. Emily, can you walk us through that?

Emily:

Totally. So think about it: crypto, like Bitcoin, isn't backed by anything tangible. No gold, no central bank. Anyone with enough computing power can "mint" new coins? just like anyone could import or replicate Toraisen if they had the means.

Michael:

And both rely heavily on public trust for their value.

Emily:

Yes! But here's the twist? unlike ancient coins, cryptos are hugely volatile. Their value can rise or fall dramatically in hours, because millions of people are trading based on speculation.

Michael:

So you're saying if Toraisen were Twitter-powered, we might have seen crypto-like price swings?

Emily:

Maybe! But in medieval Japan, data traveled slowly? messages took days or weeks? so price perceptions shifted gradually. Today, crypto reacts in real time to news, tweets, and even memes.

Michael:

Which makes them tough to use as actual money. I mean, who wants to buy a coffee with Bitcoin and then see that it doubled in price tomorrow?

【Segment 5】 The Three Functions of Money

Michael:

That brings us to a classic economic lesson: the three core functions of money. Hit us with them, Professor Emily!

Emily:

[Laughs] Okay! Money serves as:

A medium of exchange ? so we can buy and sell stuff.

A unit of account ? so we can compare the value of things.

A store of value ? so money we hold today holds its worth tomorrow.

Michael:

Easy enough. Where does crypto fall short in that list?

Emily:

The big one is store of value. If something fluctuates 10% in a day, it's hard to "store" value safely. That instability undermines its use as a price gauge and makes people wary of spending it.

Michael:

And it's not legal tender either?like you said, nobody's accepting it for taxes. So it lacks broad acceptance.

Emily:

Exactly. It's like having bar coupons in a town with no bars.

Michael:

Great metaphor. So for crypto to really become "money," society has to agree it's money. That means legal treatment, price stability, general usage...

Emily:

...And most critically, trust. That old monastery credit note had it, Toraisen managed to get it, and today's cryptocurrencies are still earning it.

【Segment 6】 Lessons for the Future of Money

Michael:

So, what's Soejima's final message here? What are we supposed to take away?

Emily:

That the design of a money system is never fixed. It evolves, influenced by society's needs, available tech, and how much people believe in its usefulness. Today, with stablecoins, CBDCs, DeFi, and Web3, we're essentially living through another monetary experiment.

Michael:

And understanding how money worked in the past helps us build smarter systems in the future.

Emily:

Exactly. History doesn't repeat, but it rhymes?and sometimes coins from a thousand years ago hum the same tune as blockchain today.

Michael:

That's it for our first episode of the SBI-FERI Podcast! Thanks for joining us for this deep dive into ancient coins and futuristic tokens.

Emily:

Big thanks to Mr. Yutaka Soejima for his incredible report. If you're interested, you can find "Toraisen and Cryptocurrencies" on the SBI FERI website?we'll drop the link in the show notes.

Michael:

We'll be back soon with more insights into the financial systems shaping our world. Until then, stay curious, stay thoughtful...

Emily:

...and never underestimate the power of a little coin.

Michael & Emily:

Bye for now!